

## J. D. Salinger の作品における

### Jack Kerouac 的カウンター・カルチャー表象

尾田 知子

#### はじめに

J. D. Salinger (1919-2010)と Jack Kerouac (1922-1969)を結びつける手がかりは、Salinger の中編“Seymour: An Introduction” (1959)にある。この作品で Salinger は、分身の役割を担う語り手を媒介して、アメリカ文学におけるカウンター・カルチャーの担い手であるビート・ジェネレーションの作家を批判している。「ビート族」(“the Beat”)らに対して「だらしない者たち」(“the Sloppy”)、「短気な者たち」(“the Petulant”)、そして「禪の破壊者」(“Zen-killers”)等の否定的な語を羅列するとともに、禪の影響を受けたヒッピーのような人たちを“the Dharma Bums”と揶揄している(*Raise High* 62)。一方、その“the Dharma Bums”が 1958 年に出版された Kerouac の小説のタイトルでもあることは、Salinger の文学作品と Kerouac をはじめとするビート・ジェネレーションの作品との共鳴を示唆している。それにもかかわらず、これまでの Salinger 研究は両者の交差点を追究することなく、個々の作品の東洋思想的ルーツの探究と特定に終始してきたと言える。Salinger とカウンター・カルチャーの関連性は言及のみにとどまり、Salinger の作品をビート・ジェネレーションの文学と実際に照らし合わせて検討した先行研究は存在しない。したがって、Salinger の作品において、一見すると無作為に羅列されているように見える複数の宗教・文化が同一の文学空間に共存している意義や、そこにカウンター・カルチャー的側面を見いだせるか否かは、検討の余地を十分に残している。物質主義への批判から精神面での充足を目指したビート・ジェネレーションの作家集団は、息の詰まるような因習に対する抵抗を意図して、傾倒していた東洋思想、およびネイティブ・アメリカン等、White Anglo-Saxon Protestant (WASP)に対して「オリエンタル」とみなされる宗教的・民族的マイノリティを表象した。Salinger の作品にも顕著に見られるこうした複数の宗教・文化の並列・共存は、彼の「東洋」や「オリエンタル」の表象に Kerouac の作品と同様のカウンター・カルチャー的側面を、より具体的に見いだす重要な手がかりとなりうる。そこで本発表では、Kerouac の小説 *Tristessa* (1960)と Salinger の“Seymour: An Introduction”の比較考察により、Kerouac の「オリエンタル」表象との類似性を指摘することで、Salinger の作品をカウンター・カルチャーの観点から研究する意義を主張した。

#### Salinger と Kerouac の交差点—多文化共存による東洋の理想化

メキシコ人女性 *Tristessa* の薬物中毒と貧困生活の年代記の形をとる小説 *Tristessa* では、Kerouac にとってのオルタナティブな価値体系の主要な要素である仏教思想の探求が散文体で行われており(Theado 125)、作者自身の理解に基づいて解釈された東洋思想が多分に使用されている。具体的には、メキシコで信仰されており作者自身の出自とも馴染み深いカトリックのシンボルと仏教的なモチーフが共存しており、聖人として描写される *Tristessa* には、宗教的な要素に基づく美しさと純真さが付与されている。次の引用で示すように、Salinger の作品と共鳴する宗教・文化の複数性の一例は、聖人としての *Tristessa* の人物描写における多文化のイメージである。

... and I'd come out of that interview with a version of *Tristessa* in my bed in my arms, the strangeness of her love-cheek, Azteca, Indian girl with mysterious lidded Billy Holliday eyes and spoke with great melancholic voice like Luise Rainer sadfaced Viennese actresses that made all Ukraine cry in 1910.

Gorgeous ripples of pear shape her skin to her cheekbones, and long sad eyelids, and Virgin Mary resignation, and peachy coffee complexion and eyes of astonishing mystery with nothing-but-earth-depth expressionless half disdain and half mournful lamentation of pain. (*Tristessa* 8)

28 歳のメキシコ人女性の *Tristessa* に対して、作者 Kerouac の宗教的ルーツであるカトリックの聖母に加え、アステカのインディオ、黒人歌手 Billie Holiday (1915-1959)、ユダヤ系ドイツ人俳優 Luise Rainer (1910-2014)のイメージが同時に重ね合わされている。加えて、この小説全体においても多文化共存の空間が形作られており(e.g. *Tristessa* 11, 15, 25-26, 29, 33, 34, 71)、*Tristessa* は東西の宗教のイメージを携えた聖人として理想化されている。作者 Kerouac は、西洋をはじめとする複数の文化と並列・共存させる形で「東洋」を想起させる語句を使用し、その宗教や思想を理想化しているのである。その根底にあるカウンター・カルチャー的な意図は、第

二次大戦後にとりわけ猛威を振るった物質主義的・消費主義的価値観に対する批判に由来しており、小説 *Tristessa* にも明確に示されている(31)。アメリカにとっての身近な「東洋」たるメキシコに対する独りよがりなオリエンタリズム的な理想化の違和感に度々気づきながらも、Kerouac は正面から対峙することなく現実から目をそらし(24)、*Tristessa* のテキストを通じてオルタナティブな場としての理想郷を創造する試みを続ける。

Salinger の文学における主要登場人物 Seymour も、入り混じる東西の宗教・文化を体現している。“Seymour: An Introduction”において東洋趣味を持つ Seymour を揶揄して使用されている「ユダヤ・アイルランド系東洋人」(“Semitic-Celtic Oriental,” *Raise High* 78)という言葉は、ユダヤ系とアイルランド系の出自を持つ Seymour を、WASP を中心として成り立ってきたアメリカ社会において周縁的な位置に追いやられている「東洋人」と結びつけている。作者自身の伝記的事実にも通じるユダヤ系とアイルランド系の出自が「オリエンタル」なものとして見なされているのである。

“Seymour: An Introduction”では、作者の分身としての役割を担う語り手の Buddy によって、短編“A Perfect Day for Bananafish” (1948)における Seymour の突然のピストル自殺の背景にある複雑な理由の説明が試みられているが、その際に兄 Seymour の聖性を様々な表現で描写している。Buddy は Seymour を“a mukta, a ringding enlightened man, a God-knower” (68)と形容し、さらには兄を“A saint?” (69)と問う。そして次のように、Seymour の聖性を東西の宗教性を用いて描写している。

My brother, for the record, had a distracting habit, most of his adult life, of investigating loaded ashtrays with his index finger, clearing all the cigarette ends to the sides—smiling from ear to ear as he did it—as if he expected to see Christ himself curled up cherubically in the middle, and he never looked disappointed. (*Raise High* 69)

灰皿に山盛りになった煙草の吸殻を人差し指で調べて脇へ寄せる Seymour の癖を引き合いに出し、まるで吸殻の中央に天使のように身を丸めたキリストを見ることを期待しているようであったと Buddy は想起する。彼は東洋思想とキリスト教のシンボルの両方を使用し、Seymour に東西の宗教性を付与しているのである。

Kerouac の *Tristessa* 同様、“Seymour: An Introduction”における東西の宗教・文化の並列・共存の目的もまた、「東洋」の理想化にある。語り手の Buddy によれば、中国や日本の詩を愛好する(74-78)Seymour は、アメリカ製の大型冷蔵庫から食物を出して食べたり、八気筒のアメリカ車を運転したり、病気になればすぐさまアメリカの薬を服用したり、両親や姉妹をヒトラーのドイツから守るためにアメリカ陸軍に頼ったりという、アメリカの現実を反映しない詩を、俳句をはじめとする「東洋」の形式で創作していた(79)。さらに Seymour はそれらの詩を“too un-Western, too lotusy” (79)と述べたという。ヒンドゥー教や仏教における清らかさや聖性の象徴である蓮の花を持ち出して、自作の詩を「非西洋的」と形容する Seymour のエピソードには、複数の宗教・文化の共存が示すアメリカ的ないしは西洋的な、とりわけ物質主義的な価値観の限界の提示と、そのオルタナティブとしての「東洋」の宗教の理想化の意図が垣間見える。

## おわりに

長年絶対的な地位を占めてきた西洋の論理に対抗しうるものとして、作者の理解するところによる「東洋」の宗教・文化が理想化されている点は、Kerouac の *Tristessa* と Salinger の“Seymour: An Introduction”の共通項である。ともすればオリエンタリズムに陥る危険性をはらみつつも「東洋」の理想化を繰り返し表現する両者の作品は、アメリカの主流社会・文化に対して抱いてきた閉塞感と、その打開策としての文学的抵抗への執念を感じさせる。Kerouac の作品におけるカウンター・カルチャー的な「オリエンタル」の使用が Salinger の作品においても認められることから、Salinger の「東洋」表象もまたカウンター・カルチャー的な色合いを濃く持つ可能性が浮かび上がる。西洋に匹敵する価値を「東洋」に見だし付与することで、Salinger はアメリカの文化・社会構造に長く根付いてきた WASP 中心主義への対抗を表現していると考えられる。

## 引用文献

Kerouac, Jack. *Tristessa*. 1960. Penguin, 1992.

Salinger, J. D. *Raise High the Roof Beam, Carpenters, and Seymour: An Introduction*. 1963. Penguin, 1994.

Theado, Matt. “Tristessa (1960), Visions of Gerard (1963), and Buddhism.” *Understanding Jack Kerouac*. U of South Carolina P, 2000, pp. 123-40. rept. in *The Beat Generation: A Gale Critical Companion*. edited by Lynn M. Zott, 3 vols. Gale, 2003, pp. 124-31.

\* 本研究は JSPS 科研費 JP19J10995 の助成を受けている。